



30 空飛ぶ木馬

(中国 ウイグルの昔ばなし)

「王様、これは空飛ぶ木馬でございます。」

ある日、大工が鍛冶屋とウデ比べをするために、不思議な木馬を王様に披露しました。興味をもった王子様が木馬にまたがると、空へ舞いあがって猛烈な速さで飛んで行きました。

異国へ降り立った王子様が見物していると、人々が空の一点を眺めていました。

聞けば、この国の王様がお姫様をかわいがるあまり、空に浮かぶお城に閉じこめていたとか。

木馬で空へあがると、そこには美しいお姫様がいて、二人はひとめで恋に落ちました。

ところが数日して、何者かがお姫様に会っていると気づいた王様は、空の城中にうるしを塗りました。

うるしだらけになった王子様は服を脱ぎ捨てますが、それを老人が拾ってしまいます。

老人が処刑されるのを知った王子様は、正直に名乗り出ますが、王様は王子様を処刑しようとした。

王子様は木馬で空の城へ行き「私といっしょに来てください」と、お姫様を乗せて国に帰りました。

二人はいつまでも幸せに暮らしたそうです。

空に舞いあがり、美しいお姫様と出会いました。

ローム君の新・博物日記

世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマを一つとりあげ、そこに隠れているいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

●空へとふくらんだ想像力。

「空飛ぶ木馬」は、シルクロードの中央アジアで活躍したウイグルに伝わる昔ばなしです。父が娘を可愛がるあまり幽閉するが、若い男がやってきて連れ出してしまう、という筋は珍しいものではありません。「父の独占欲」は、人類普遍のテーマです。しかし、この昔ばなしが他と違うところは、娘が隔離される場所が、空の上だったということ。ドイツや日本の昔ばなしでは、それは森の奥深くなのだとか。中央アジアに多い荒涼とした山に囲まれ沙漠が広がる環境から、隠す場所を自然と空の上に想像した、と考えると面白いですね。また、遠くから宝物を持ち帰るのは昔ばなしの典型ですが、この「空飛ぶ木馬」は、実際に東西交流が反映されていると考えられます。空を飛ぶものが木馬なのも珍しいこと。未来のマシンのような豊かな想像は、文化の交流が影響したのかもしれない。

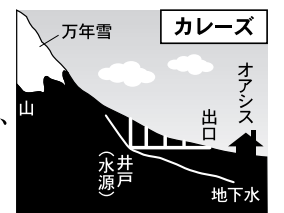
●沙漠への挑戦を支えたもの。

ウイグルの人々が暮らすタリム盆地には、「生きて帰れない」という意味のタクラマカン沙漠があります。かつてシルクロードの商人は、この過酷な乾燥地域を通過する、つまり誰もやりたがらないことをすることで、莫大な利益を得ました。最も強力な輸送手段は、フタコブラクダ。10日間水なしで過ごせ、250kgの荷を背負って、一日に40kmの移動が可能だとか。コブの脂肪や特殊な血液などで、水分が

少なくとも生きられるからです。人間なら水分を12%失うと生命の危険にさらされるそうですが、ラクダは30%位水分を失っても生きられると言われていています。乾燥した沙漠を移動するシルクロードの商人達にとって、ラクダは積み荷以上の価値があったのかもしれない。

●シルクロードのオアシスの知恵。

ウイグルには、沙漠のシルクロードを中継するオアシスが多くありました。オアシスというポツと池がある所を想像しますが、沙漠のシルクロードでは、川沿いにできたものが多いのです。それ以外の水に乏しい所で暮らす人々は、カナートやカレーズと呼ばれる方法で地下水を得ました。まず、山寄りに縦穴(母井戸)を地下水まで掘ります。そして、街と母井戸の間に縦穴を掘り、その底を左右に広げ横穴とし、それを繰り返してつなげ、地下水を街へ引くのです。人間の努力とともに繁栄したオアシス都市。そして、それを連ねた沙漠のシルクロードは、やがて陶磁器などの重いものを大量に輸送できる海上交易が隆盛するにつれ、主役の座を明け渡すこととなります。「空飛ぶ木馬」のような乗り物が本当であれば、歴史は違っていたのかもしれないね。



昔ばなし監修/昔ばなし研究所所長 小澤俊夫
取材協力/奈良女子大学文学部教授 相馬秀廣